

長期臥床在宅高齢者と健常者の皮膚表面の健康度比較 —清潔行為・スキンケアとの関連による比較—

堀 良子¹⁾, 水口陽子¹⁾, 岡村典子¹⁾, 水澤久恵¹⁾,
渡部江里子²⁾, 中川恵子³⁾

1)新潟県立看護大学, 2)訪問看護ステーションテンダー上越, 3)新潟臨港病院社会医療事業部

キーワード: 長期臥床患者, 皮膚機能, スキンケア

目的

長期臥床の高齢患者では, 皮膚の真菌症や皮膚の萎縮, 乾燥してざらざらな肌などの不健康な状態がしばしばみられる. このような対象者の多い訪問看護の現場では, 日常的な皮膚のケアは新たな不健康を作り出さないための大きな関心事の一つとなっており, EBN ケアへの要望がある. そこでこのような患者と健常者の皮膚との対比で皮膚の健康状態を総合的に明らかにし, 皮膚の清浄度(汚れの程度)および清潔保持やスキンケアとの関連を検討することを目的として調査を実施した.

研究方法

1. 研究フィールドと対象者の選定

新潟県内2つの市の訪問看護ステーションの管理下にある, 殆どベッド上臥床で1ヶ月以上療養を継続している高齢患者を対象とした. また, 患者と同年代の健常者で生活を共にする家族の中から健常対象者を選び比較対象とした. 研究期間は平成20年12月~平成21年3月である.

2. データ収集

1) 基礎情報の収集

年齢, 性別, 疾患名, 観察される皮膚状態, 入浴・清拭など皮膚の清潔保持方法の頻度・方法, 日頃のスキンケアの有無と方法について対象者または家族への聞き取りと観察により収集した.

2) 皮膚の健康情報, 汚れの程度の収集

健康情報としてバリア機能, 角層水分量, 清浄度, pH を測定した. 皮膚清浄度は ATP を指標とし, 専用の綿棒で5×5 cmの正方形面積をまんべんなく拭って採取し専用の測定器で測定した. 皮膚のバリア機能は経表皮水分喪失 Transepidermal water loss(TEWL)量を密封式水分蒸発測定器により測定した. 角層水分量, pH は Corneometer により測定した. 測定部位は上背部とした.

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については, 新潟県立看護大学倫理委員会の承認を得て承認された方法に則って行った.

結果

対象となった長期臥床高齢患者は全部で48名, 健常者は27名であった. 患者の平均年齢82.96(±8.25)歳, 健常者73.78(±6.73)歳であった. 性別は患者男性22, 女性26名, 健常者男性9, 女性18名であった. 皮膚の肉眼的観察結果は, 健常者に比べて患者では皮膚の乾燥, 萎縮, 湿疹を有する割合が合計で患者41.7%, 健常者25.9%であり, 患者が1.6倍程度高かった(図1). 皮表の健康状態を表す測定結果において患者と健常者の対比で有意に差のある傾向を示したのは, ATP ($p=0.06$)のみであった(表1). 清潔の保持方法では, 両者とも一人を除いて全員が

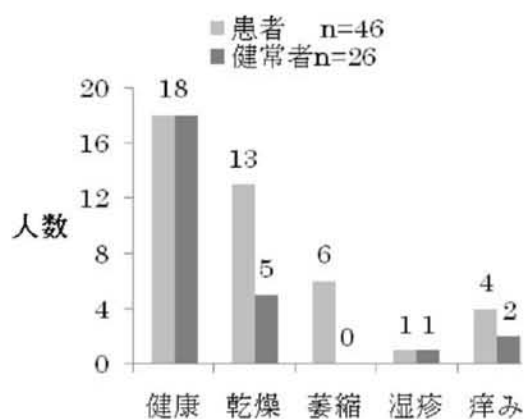


図1 皮膚の状態

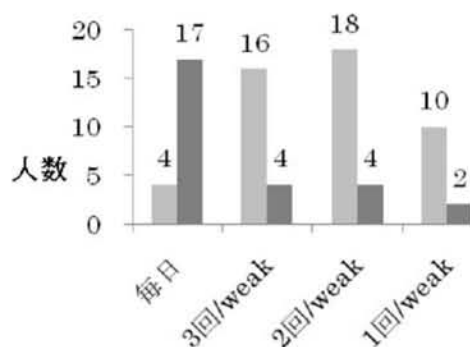


図2 保清の頻度

表1 皮表状態の測定結果 (Mean)

	患者 n=48	健常者 n=27	p 値
経皮水分喪失量 (mg/cm ² /h)	0.80	1.12	0.29
角層水分量 (capacitance)	46.23	51.34	0.41
pH	5.59	5.39	0.65
ATP	6.88	6.44	0.06

表2 スキンケアを行っている者の割合

	行っている	行っていない
患者	38 (48.1%)	8 (10.1%)
健常者	10 (12.7%)	15 (19.0%)

(χ^2 検定 p<0.01)

入浴によっていた。患者では週1回入浴の間に清拭を行っているケースもあった。保清の頻度は、健常者では毎日が63.0%と多かったが、患者では週3回ないし週2回のペースで入浴を行っている者の割合が高く、週1回の人でも20.8%いた(図2)。スキンケアを行っている者と答えた者は患者では82.6%、健常者では40.0%で有意に患者の割合が高かった(χ^2 検定 p<0.01 表2)。その内容は、入浴後に「スキนครリームを塗布する」、「入浴剤や洗浄剤を適するものにする」、「発赤や乾燥などの部位に処方された軟膏や白色ワセリンなどを塗布する」というものだった。保清頻度およびスキンケアと皮膚状態との関連については、スキンケアと角層水分量に弱い相関が見られた($r=0.317$, $p=0.007$)が、保清頻度とはいずれの相関もみられなかった。角層水分量とpHにも弱い相関があった($r=0.313$, $p=0.006$)が、経皮水分喪失量(バリア機能)と他の健康指標との相関はみられなかった。

考察とまとめ

長期臥床高齢患者と健常者では、皮膚の健康指標となる測定結果に有意な差はなかった。細胞由来のタンパク汚れを表すATP値は両者で有意な差の傾向を認め、保清頻度の差によるものと考えられた。しかし、この傾向は皮膚のバリア機能への影響はなかった。また、スキンケアは患者で行っている割合が有意に高かったが、角層水分量と相関があることから、看護者の皮膚への配慮が効を奏し保湿効果につながっているものと考えられた。